

# アラビア語の *kaana* における節構造分析

— コピュラと助動詞の比較を通じて —

永 野 隆 童

## 1. 問題の所在

アラビア語では、「A は B だ」という文を作る場合、主語と述語を繋げる所謂 *be* 動詞のようなコピュラ動詞を用いない。アラビア語においてこのような文を作る場合、主語と述語をそのまま並べ動詞を用いない文（以下非動詞文）で表す。ところがこの非動詞文を過去にする際には、*kaana*<sup>1)</sup>という完了動詞を用いて動詞を含んだ文（以下動詞文）で表す。非動詞文のコピュラ文と動詞文のコピュラ文では(1a)と(1b)で示すように述語に違いが現れる。

### (1) a. *muḥammadun taalibun*

Muhammad.NOM student.NOM.SG.M

「ムハンマドは学生です。」

### b. *kaana muḥammadun taaliban*

be.PFV.3.SG.M Muhammad.NOM student.ACC.SG.M

「ムハンマドは学生でした。」

(竹田,2013:87)

どちらの文も主語の *muḥammadun* は主格<sup>2)</sup>で現れているが、述語が(1a)の場合には *taalibun*（主格）で現れているのに対し、(1b)の場合には *taaliban*（対格）で現れている。つまり現在時制の非動詞文の述語は主格で現れるのに対し、過去時制の場合には完了動詞 *kaana* を用いた動詞文で表され述語は対格で示されるといった違いが見られる。

また *kaana* には(2)のように助動詞的に用いられる用法もある。

### (2) *kaana l-ttullaabu yaqra'uuna l-jariidata*

be.PFV.3.SG.M the-student.NOM.PL.M read.IMPV.3.PL the-newspaper.ACC

「学生たちはその新聞を読んでいました。」

(新妻,2009:76)

(2)における *kaana* では、動詞文を補部にとり過去の進行や習慣を表す。(1b)の *kaana* は名詞と述語を繋げるコピュラとして機能しているように見えるのに対し、(2)の文は過去の習慣や進行などを表し、助動詞的な働きをしているように見える。コピュラのように用いられる場合、

屈折要素は完了動詞の *kaana* のみであるが、助動詞として用いられる場合には完了動詞 *kaana* と主動詞の両方が選択され屈折要素を2つ持つことになる。

本稿ではこのような問題を踏まえ、*kaana* には2つの統語機能があると仮定し、その節構造の違いを考察していく。1つ目の機能は、(1b)のような過去時制のコピュラ文において主語と述語を繋げるコピュラの機能である。2つ目の機能は(2)のような、動詞文を補部にとり単一の動詞では表せないテンスやアスペクトを表す助動詞的機能である。はじめにそれぞれの用法を整理し、コピュラ的に用いられる *kaana* と、助動詞的に用いられる *kaana* の節構造に焦点を当てていきその違いを考察していく。

## 2. *kaana* の用法

本節では大きく二つの用法で用いられる *kaana* について説明していく。はじめに「AはBだ」といった、非動詞文を過去で示す際に用いられるコピュラ動詞 *kaana* の用法について見ていく。その次の節では動詞文を補部にとる *kaana* の助動詞的用法を見ていく。

### 2.1. コピュラ動詞 *kaana* の用法

動詞が完了動詞・未完了動詞に分類されるアラビア語において、*kaana* は完了動詞に分類され、*kaana* の未完了動詞形としては *yakuuna* がある。アラビア語の動詞は人称、数、性といった素性が含まれているため様々な活用があり、本稿で扱う *kaana* の活用は次の表の通りとなる。

<表 1 : *kaana* の活用表><sup>3)</sup>

人称	単数	双数	複数
3人称男性	كَانَ (kaana)	كَانَا (kaanaa)	كَانُوا (kaanuu)
3人称女性	كَانَتْ (kaanat)	كَانَتَا (kaanataa)	كَانْنَ (kunna)
2人称男性	كُنْتَ (kunta)	كُنْتُمَا (kuntumaa)	كُنْتُمْ (kuntum)
2人称女性	كُنْتِ (kunti)		كُنْتُنَّ (kuntunna)
1人称	كُنْتُ (kuntu)	كُنَّا (kunnaa)	

*kaana* の活用は人称、数、性によって表1のように変化する。そのため *kaana* を用いる場合には、主語の人称代名詞は省かれる。(3a)の非動詞文では、主語の人称代名詞 *anaa* が現れているが、*kaana* が現れると人称代名詞は省かれ(3b)のように *kaana* は一人称単数の *kuntu* という形で示される。

#### (3) a. *anaa taalibun*

I student.NOM.SG.M

「私は学生です」

b. **kuntu taaliban**

be.PFV.1.SG student.ACC.SG.M

「私は学生でした。」

(新妻,2009:62)

最初に述べたとおり(3a)と(3b)を比較してみると、(3a)の非動詞文では主格で現れていた述語 *taalibun* は、(3b)のように *kaana* が現れると *taaliban* という対格で示されるといった違いが見られる。またアラビア語では(4a),(4b)のように VS-SV の交替が見られ、*kaana* に限らず VS の語順をとる場合には全ての動詞が、主語の人称・数に関わらず「第三人称単数男性」もしくは「第三人称単数女性」の形で文頭に現れる。

(4) a. **kaana hawulaa'i l-muwazzafuuna mashfuuliina**

be.PFV.3.SG.M these employee.NOM.PL.M busy.ACC.PL.M

「この職員たちは忙しかったです。」

b. **hawulaa'i l-muwazzafuuna kaanuu mashfuuliina**

these employee.NOM.PL.M be.PFV.3.PL.M busy.ACC.PL.M

「この職員たちは忙しかったです。」

(竹田,2013:61)

ただし主語が明示されない場合には、(5)のように *kaana* は主語の人称・数・性に合わせる必要がある。

(5) **kunnaa mushfuuliina**

be.PFV.1.PL busy.ACC.PL.M

「私たちは忙しかったです。」

(竹田,2013:60)

またコピュラ動詞 *kaana* がとる補部には「名詞・形容詞・能動分詞・受動分詞・前置詞」があり、前置詞以外の述語は対格で示される。

## 2.2. 助動詞 *kaana* の用法

*kaana* には非動詞文を過去にする用法以外にも、助動詞的<sup>4)</sup>に用いる用法がある。*kaana* が助動詞的に用いられる際、「完了」・「未完了」といったアラビア語の動詞が持つアスペクトをより明確にするといった機能がある。助動詞 *kaana* の用法をみる前に未完了動詞について少し触れておく。

未完了動詞はまだ終了していない行為や、現在の習慣、進行そして近い未来を表現する際に用いられ、(6)では未完了動詞を用いて現在進行を表している。

(6) *yaqra'u* 'ab-ii l-jariidata laana

read.IMPV.3.SG.M father-my the-newspaper.ACC now

「父は今、新聞を読んでいる。」

(竹田,2013:87)

(6)では未完了動詞 *yaqra'u* が、(a)*laana* という副詞の働きにより現在進行として解釈されている。*kaana* を助動詞的に用いる場合には(7)のように用いられ、VS-SV 交替も見られる。

(7) a. **kaana** a-rrijaalu yashtaghiluuna fii l-maşna'i

be.PFV.3.SG.M the-men work.IMPV.3.PL.M in the-factory

「その男たちはその工場で働いていました。」

b. a-rrijaalu **kaanuu** yashtaghiluuna fii l-maşna'i

the-men be.PFV.3.PL.M work.IMPV.3.PL.M in the-factory

「その男たちはその工場で働いていました。」

(八木,2013:191)

(7)のような文では過去の進行や習慣を表し、過去の時点における動作の進行として解釈される。このことから *kaana* は形態的には完了形ではあるが、実際には[+Past]の素性を持っており、[*kaana*[Past]+未完了動詞[Imperfect]]であることが考えられる。また VS 語順の(7a)の *kaana* は三人称単数の形で現れているが、未完了動詞 *yashtaghiluuna* は主語との完全一致を示し三人称複数形で示されている。つまり VS 語順において、*kaana* は主語と部分一致(性素性)をし、未完了動詞は主語と完全一致を示す。しかし(7b)のような SV 語順では *kaana* と未完了動詞の両方が主語との完全一致を示す。

本節では *kaana* の二つの用法を見てきたが、コピュラ動詞 *kaana* は非動詞文を補部にとり、助動詞 *kaana* は動詞文を補部にする。そしてどちらも *kaana* が主語に先行する VS 語順の場合には *kaana* と主語は完全一致を示さないが、主語が *kaana* に先行する SV 語順の場合にのみ完全一致を示す。次の節では、コピュラ動詞 *kaana* の節と助動詞 *kaana* の節構造がどのように違うのかをそれぞれ詳しく見ていく。

### 3. コピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の構造

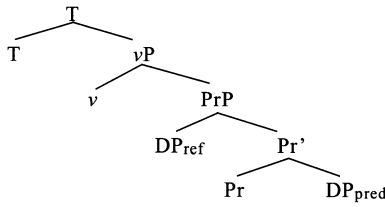
この節のはじめでは、コピュラ文における現在時制と過去時制の構造の違いを見ていく。その後、コピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の構造を個別に見ていき、この2つの構造の違いを比較していく。

#### 3.1. コピュラ文における現在時制と過去時制

まずは明示的な動詞が現れない現在時制のコピュラ文と、明示的な動詞 *kaana* が現れる過去時制のコピュラ文の比較を行っていく。本稿ではアラビア語の非動詞文と、明示的コピュラ動詞 *kaana* が現れる動詞文はどちらも小節構造をなしているという考えに基づき分析を進める。

Mikkelsen(2005)はコピュラ節の基本構造を次のように示している。

(8)



(Mikkelsen,2005:166)

Mikkelsen(2005)はコピュラ節の構造を(8)のように示しており、この構造においてコピュラ動詞は *v* に位置する。Mikkelsen(2005)の分析では、英語などのように明示的にコピュラ動詞が現れる場合には小節 PrP の上に *vP* が投射され、アラビア語などのように明示的な動詞が現れない場合には、PrP の上に直接 T が投射されると考えられている。現在時制の非動詞文のコピュラ文において *vP* が投射されるか否かの問題については Shlonsky & Rizzi(2018)で述べられており、非動詞文における派生では *vP* は投射されないと考えられている。

(9) a. al-rajulu mudarrisun

the-man.NOM teacher.NOM

‘The man is a teacher.’

b. kaana al-rajulu mudarrisan.

be.PFV.3.SG.M the-man.NOM teacher.ACC

‘The man was a teacher.’

(Shlonsky & Rizzi, 2018:39)

アラビア語の現在時制における非動詞文では、(9a)のように動詞が音形として現れず、述語が主格で示される。対して(9b)のようなコピュラ動詞 *kaana* が現れる文では、動詞が音形として現れ、前置詞以外の述語が対格で示される。Shlonsky & Rizzi(2018)は、(9b)における対格付与について、述語の対格の実現は語彙的動詞 *kaana* によってではなく、機能的な主要部 *v* によるものと指摘している。対して(9a)は音形として動詞が現れないだけでなく、述語が対格で示されないことから機能的な主要部 *v* は投射されず述語はデフォルトケースの主格で現れることを主張している。このことから(9a),(9b)はそれぞれ次のような構造で示すことができる。

(10) a. [T [PrP al-rajulu [Pr' [DP mudarrisun defaultNOM]]]]

b. [T [vP kaana] [PrP al-rajulu [Pr' [DP mudarrisan ACC]]]]

(10a),(10b)のようにアラビア語における現在時制のコピュラ文と、過去時制のコピュラ文は異なる構造をしていることが考えられる。(9a)のような現在時制のコピュラ文では(10a)が示すように *vP* は投射されず、T は小節 PrP を直接補部にとる。そして述語が前置詞以外の場合にはデ

フォルトケースとして主格が与えられる。対して、(9b)のような過去時制の *kaana* が用いられるコピュラ文では(10b)が示すように動詞 *kaana* が明示されるため、*vP* が投射され *v* が持つ動詞的機能によって前置詞以外の述語は対格で示されるという構造が考えられる。

本節では現在時制と過去時制のコピュラ文の構造の違いを Mikkelsen(2005), Shlonsky & Rizzi(2018)の先行研究とともに見てきた。この2つの違いは *vP* が投射されるかどうかであり、この投射の結果によって述語の格表示も異なる。次の節では実際に過去時制における *kaana* のコピュラ文の構造をより詳しく見ていく。

### 3.2. コピュラ動詞 *kaana* の構造

Benmamoun (2000) では VS 語順は *v* to T 移動によるものであるとされているが、Jouini(2020) ではさらに VS 語順は T to C 移動をしていると考えられている。*v* to T の派生と T to C はそれぞれ次のように表すことができる。

- (11) a. [TP *kaana*]<sub>[vP DP [*v' kaana*]]<sub>[PrP DP [Pr' DP,AP,ACTP,PASSP]]]</sub>  
 b. [CP *kaana*]<sub>[TP DP [T' *kaana*]]<sub>[vP *kaana*]]<sub>[PrP DP [Pr' DP,AP,ACTP,PASSP]]]</sub></sub></sub></sub>

*v* to T の考えであれば(11a)のように完了動詞 *kaana* は元位置の *v* から T へと上がり、主語 DP は TP 指定部には上がらず、*vP* 指定部に留まっているという構造を示す。対して T to C の考えであれば *kaana* は T からさらに CP 節内に上がり、主語は T の EPP 素性を満たすため TP 指定部に位置することが考えられる。非対格動詞と同じような構造をとるコピュラ動詞の場合、*vP* 指定部は空であることが考えられるが、(11a)では *vP* 指定部に主語 DP が来てしまう。一方、(11b)の場合には *vP* 指定部は空のまま PrP の指定部にある主語 DP は T が持つ EPP 素性によって TP 指定部に繰り上がっているため、T to C の考えがより妥当的であると考えられる。また *kaana* が主語に先行する場合、*kaana* は主語と部分一致を示し、主語が *kaana* に先行する場合には完全一致を示す。この一致問題を説明するために Jouini(2020)は、VS 語順における動詞は、分離 CP 内の Fin に移動する説を提唱している。この説は Rizzi(1997)の The Force-Finiteness System の考えに基づくもので、Fin は一般的に IP(TP)領域内の屈折にリンクする屈折素性を持つと考えられている。また Jouini(2020)はアラビア語の VS 語順では SubjP が欠如しているために動詞と主語 DP との部分一致が起これ、SV 語順では SubjP が投射されることによって動詞と *pro* が一致し、完全一致が生じると主張している。VS 語順のように主語と部分一致を示すような動詞は Fin に繰り上がり、SV 語順のように *pro* と完全一致を示す動詞は、*pro* と隣接する位置の SubjP の主要部に留まると考えられている。実際に次の文を見ながら分析していく。

- (12) *kaana al-awlaadu fii l-bayti*  
 be.<sub>PFV.3.SG</sub> the-boys.NOM in the-house.GEN  
 ‘The boys were in the house’

(13) [<sub>Fin</sub> kaana][<sub>TP</sub> al-awlaadu [<sub>T'</sub> kaana][<sub>vP</sub> al-awlaadu [<sub>v'</sub> kaana][<sub>PrP</sub> al-awlaadu...]]] (Jouini,2019:4)

(12)のような VS 語順の場合、(13)の構造のように *kaana* はコンピュータ動詞の基底位置の *v* に位置し小節を補部にとり、その後 *kaana* は T に上がり主語 DP は TP 指定部に上がる。VS 語順の場合には SubjP は欠如しており *pro* と隣接しないため、*kaana* は主語 DP と部分一致を示し、その後 Fin に繰り上がると考えられている。それでは完全一致を示す SV 語順の場合にはどのような構造を示すのかを見ていく。

(14) al-awlaadu kaanuu fii l-bayti  
the-boys.NOM be.PFV.3.PL in the-house.GEN  
'The boys were in the house'

(15) [<sub>TopP</sub> al-awlaadu][<sub>SubjP</sub> *pro* [<sub>Subj'</sub> kaanuu][<sub>TP</sub> kaana...]] (Jouini,2019:2)

(14)のような SV 語順の場合には(15)の構造のように、主語 DP が話題化により完了動詞 *kaana* の上に位置している。この時 SubjP の指定部に *pro* が位置し、この SubjP 内で *pro* と *kaana* が照合した結果完全一致をしていると考えられている。

Jouini(2020,2019)では、VS 語順における主語-動詞は部分一致を示し、このような主語 DP と部分一致を示すような動詞は Fin に上がり VS 語順が生じると考えられている。対して SV 語順における主語-動詞は完全一致を示しており、このような動詞は *pro* と照合し、隣接する位置にある SubjP の主要部に留まり主語と完全一致を示していると考えられている。SV 語順が話題化によって引き起こされるのかどうかについては、アラビア語の VS-SV 交替の制約から見るることができる。アラビア語において、SV 語順の主語には限定名詞しか来ることができず、非限定名詞は SV 語順の主語に置けないという制約がある。つまり非限定名詞は VS-SV 交替ができないということから、SV 語順は基本語順である VS 語順から話題化により生じていることが考えられる。このことから本稿では VS 語順を基本語順とし、その基底構造を次のように設定する。

(16) [<sub>CP</sub> kaana [<sub>TP</sub> DP [<sub>T'</sub> kaana][<sub>vP</sub> kaana][<sub>PrP</sub> DP [<sub>Pr'</sub> DP,AP,ACTP,PASSP]]]]

(16)が示す構造ではコンピュータ動詞 *kaana* が *v* に位置し小節を補部にとる。*kaana* は past の素性を得るために TP 主要部に上がり、主語 DP は EPP 素性によって TP 指定部に繰り上がり *kaana* は T to C 移動によりさらに C へと繰り上がるという構造をコンピュータ動詞 *kaana* の節構造として設定する。一致や話題化などによる語順交替によってこの構造からさらに派生していくことが考えられるが、本稿ではコンピュータ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の節構造に焦点を当て、一致問題に関しては深く分析しない。

### 3.3. 助動詞 *kaana* の構造

助動詞 *kaana* の構造でまず挙げられる問題が、コンピュータ動詞 *kaana* の構造とは違い、屈折要素が2つ（助動詞 *kaana* と未完了動詞/完了動詞）あることである。Bjorkman(2012)は、アラビア語の動詞の Tense, Aspect を次のように分析している。

- (17) a. *darasa*  
 study.PFV.3.SG  
 ‘He studied’ Past
- b. *yadrusu*  
 study.IMPF.3.SG.M  
 ‘He studies’ Imperfect
- c. *kaana yadrusu*  
 be.PFV.3SG.M study.IMPF.3.SG.M  
 ‘He was studying/ He used to study’ Past+Imperfect (Bjorkman,2012:2)

(17a)の完了と(17b)の未完了は単一の動詞で表しているが、過去未完了を表す(17c)の場合、完了動詞 *kaana* と未完了動詞 *yadrusu* といった2つの屈折要素が現れていることが分かる。Bjorkman(2012)は、(17c)のような助動詞 *kaana* は時制の屈折において主動詞と結合しないことを主張している。また(17a)のように形態的には完了だが過去を表す文では、Aspect に屈折要素がなく、(17b)のように形態的には未完了だが現在を表す文では、Tense に屈折要素がないと主張されている。対して(17c)のような完了動詞 *kaana* と未完了動詞を用いる過去未完了を表す文では、Tense と Aspect の両方に屈折要素があると考えられている。現在を表す文における Tense の屈折素性が機能していないことは Benmamoun(2000)によっても主張されている。Benmamoun(2000)は、(18)のような慣用表現において過去完了での VSO 語順を求めることを例にとり、未完了動詞弱い T 素性を持つと主張している。

- (18) a. *baraka llahu fii-k*  
 bless.PFV.3.SG.M God in-you  
 ‘May God bless you’
- b. *llah yabarik fii-k*  
 God bless.IMPV.3.SG.M in-you  
 ‘May God bless you’ (Benmamoun, 2000:57)

このような慣用表現では(18a)がより好まれ、(18b)のような未完了動詞を選択する SVO 語順は好まれないということから Benmamoun(2000)は、完了動詞は強い T 素性を持っており、未完了動詞は弱い T 素性を持つと主張している。実際に助動詞 *kaana* がどのような構造をなしている



のかまず Jouini(2019)の分析を見ていく。

- (19) *kaanat t-taalibaatu yadrusna*  
be.PFV.3.SG.F the-student.NOM.3.PL.F study.IMPV.3.PL.F  
'The students were studying'

- (20) [TP *kaanat*][<sub>TopP</sub> *t-taalibatu*][<sub>SubjP</sub> *pro* [<sub>Subj'</sub> *yadrusna*]][TP *yadrusna*...]] (Jouini,2019:3)

(20)の構造では TP が2つ投射されており biclause の構造をなしていることがわかる。未完了動詞 *yadrusna* は前節で説明したように主語と完全一致を示すため SubjP の主要部に位置し *pro* と隣接している。対して *kaanat* は主語と部分一致を示しているためより高い位置、つまりより高い TP に位置している構造をなしている。*kaana* は主語や未完了動詞と同じ節内には位置せず、さらに上に新しい屈折要素の節を成す TP 節を作り、*kaana* 単体で節を成していると考えられている。また biclause の構造をなしていると考えた場合(19)の文は次のような構造として考えることができる。

- (21) [TP<sub>1</sub> *kaana*][TP<sub>2</sub> *t-taalibatu*][<sub>vP</sub> *yadrusna*]

助動詞 *kaana* の文では(21)のように *kaana* が単体で節をなし、*t-taalibaatu yadrusna* という動詞文がもう1つの節をなしている構造が考えられる。助動詞 *kaana* の文では、完了動詞 *kaana* と主動詞(未完了動詞/完了動詞)という屈折要素が2つあることから、TP が2つあり biclause の構造をなしているという考えが有効であると考えられる。また *kaana* は主動詞に先行していなければならないということから原則的に助動詞 *kaana* は主動詞より高い TP に位置していることが考えられる。助動詞の文においても VS-SV の交替は見られるが VS 語順が基本語順として考え、助動詞コピュラの文の構造を次の(22)ように設定する。

- (22) [TP<sub>1</sub> *kaana* [<sub>vP</sub> ~~*kaana*~~]][TP<sub>2</sub> DP][<sub>vP</sub> DP [<sub>v'</sub> IMPV]]]

助動詞 *kaana* の文は、TP が2つ投射された biclause の構造をなしており、より高い <sub>vP</sub> に位置する *kaana* は TP を補部にとりこの TP 内に[DP+IMPV]の動詞文が位置する。その後、*kaana* は past の素性を得るために TP 主要部に上がり *kaana* が単体で TP をなし、[DP+IMPV]の動詞文がより低い TP をなしているといった構造が考えられる。この基本構造から主語が *kaana* に先行する SV の語順が派生していくことが予測できる。

本節では現在時制のコピュラ文と過去時制のコピュラ *kaana* 文の構造の違いと、コピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の構造の違いを記述した。まず現在時制のコピュラ文と過去時制のコピュラ *kaana* 文の違いは述語の格の現れ方にあり、<sub>vP</sub> が投射されるかどうかによって述語の格の違いが現れる。またコピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の違いは以下のようにまとめること

ができる。

<表 2 : コピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana*>

	屈折要素	節構造	補部
コピュラ動詞 <i>kaana</i>	1つ	monoclaue	非動詞文
助動詞 <i>kaana</i>	2つ	biclaue	動詞文

この両者の大きな違いは、コピュラ動詞 *kaana* の文は屈折要素が1つで、助動詞 *kaana* の文は屈折要素が2つあることから、前者は monoclaue からなっており、後者は biclaue からなっていることである。

#### 4. 結論

本稿ではコピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の構造を、monoclaue-biclaue の観点から考察し、その違いを指摘した。コピュラ動詞 *kaana* の節は、屈折要素が *kaana* しかないことから単一の TP からなっている monoclaue の構造であることが考えられる。対して助動詞 *kaana* の構造は、完了動詞 *kaana* と未完了動詞といった屈折要素が2つ存在し、2つの TP からなっている biclaue の構造であることを考察した。コピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の構造を再度比較してみる。

(23) [<sub>CP</sub> *kaana*][<sub>TP</sub> DP [<sub>T'</sub> *kaana*][<sub>vP</sub> *kaana*][<sub>PrP</sub> DP][<sub>Pr'</sub> DP,AP,ACTP,PASSP,PP]]

(24) [<sub>TP1</sub> *kaana* [<sub>vP</sub> *kaana*][<sub>TP2</sub> DP][<sub>vP</sub> DP][<sub>v'</sub> IMPV]]

アラビア語の基本語順が VS 語順だということを前提に(23),(24)をそれぞれ基本的な構造として設定した。(23)の VS 語順におけるコピュラ動詞 *kaana* の節構造では、まず *kaana* がコピュラ動詞の基底位置である *v* に位置し、そこから *past* の素性を得るために T へと上がる。主語 DP は PrP の指定部から EPP 素性により TP 指定部へ繰り上がり、*kaana* は T to C 移動により C へと移動することが考えられる。(24)の助動詞 *kaana* の構造においては、助動詞 *kaana* が TP を補部にとり、より低い TP 内に動詞文が位置する構造が基本構造として考えられる。コピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の節構造の違いは、(25),(26)のように示せる。

(25) [<sub>vP</sub> *kaana*][<sub>PrP</sub> DP [<sub>Pr'</sub> DP,AP,ACTP,PASSP,PP]]

(26) [<sub>vP</sub> *kaana*][<sub>TP</sub> DP][<sub>vP</sub> DP][<sub>v'</sub> IMPV]]

(25)のコピュラ動詞 *kaana* は小節の PrP を補部にとり、(26)の助動詞 *kaana* は動詞文の TP を補部にとる。つまりコピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の節構造の違いは、*kaana* が補部にとる範疇の違いによるものであると考える。

以上のようにコピュラ動詞 *kaana* と助動詞 *kaana* の節構造を考察したがいくつか問題点も残った。今回は構造の違いに注目し考察しただけに留まり、それぞれの語順や一致問題に関して深く分析することができなかった。語順や一致問題に関してはさらに先行研究を読んでいくと同時に、語順の分布に関するデータを抽出して理論とデータを対照させたいと考えている。また古典アラビア語において *kaana* がそれぞれどのような現れ方をしていたかを見ることで、節構造の変化などを観察できるのではないかと考えている。今後のさらなる展開として、語順に関するデータを抽出し古典アラビア語と現代アラビア語における語順を対照し、*kaana* の構造をより詳しく通時的に見ていきたいと考えている。

## [略号一覧]

1 first person 一人称	2 second person 二人称	3 third person 三人称	
ACC accusative 対格	ACTP active participle 能動分詞	AP adjective phrase 形容詞句	
DP determiner phrase 決定詞句	F feminine 女性	FinP Finite Phrase 定性句	
GEN genitive 属格	IMPV imperfect verb 未完了動詞	M masculine 男性	
NOM nominative 主格	NP noun phrase 名詞句	P preposition 前置詞	
PASSP passive particle 受動分詞	Per person 人称	PFV perfect verb 完了動詞	PL plural 複数
PP prepositional phrase 前置詞句	PrP Predicate phrase 述部句	SC small clause 小節	
SG singular 単数	SubjP subject phrase 主語句	TopP topic phrase 話題化句	
TP Tense Phrase 時制句	VP Verb Phrase 動詞句		

## <註>

- 1) アラビア語では三人称単数男性の形が辞書の見出し語となっているため、以降 *kaana* と記載する。
- 2) アラビア語には3つの格があり、基本的には *-un* (主格)、*-an* (対格)、*-in* (属格) の接尾辞で表される。
- 3) この表は竹田(2013:60)を参照に筆者が改変したものである。
- 4) アラビア語には助動詞といった文法範疇が明確にはないため、文法書などでは助動詞的と表現されている。

## 参考文献

- Al-Aqarbeh, Rania Nayef. (2015) *The Syntax of Complex Tense Constructions in Standard and Jordanian Arabic. Human and Social Sciences, Volume 42, No. 3, (pp.965-983)*
- Aoun, J., Benmamoun, E., & Choueiri, L. (2010) *The Syntax of Arabic*. New York: Cambridge University Press
- Baker, M. (2003) *Lexical Categories. Verbs, Nouns, and Adjective*. Cambridge University Press.
- Bjorkman, B.M. (2012) *Auxiliary Verb Constructions and the Morphosyntax of Verbal Inflection*. Doctoral dissertation, MIT.
- Benmamoun, E. (2000) *The Feature Structure of Functional Categories: A Comparative Study of Arabic Dialects*. Oxford University Press.
- Benmamoun, E. (2008) *Clause Structure and Syntax of Verbless Sentences*. In Freidin, R. Otero, C. & Zubizarreta M. L.

- (eds), *Foundational Issues in Linguistic Theory* (pp.105-131). Cambridge, MIT Press.
- Bowers, J. (1993) The Syntax of Predication. *Linguistic Inquiry*, 24, 591-656.
- Citko, B. (2008) Small Clauses Reconsiderd: Not So Small and Not All Alike. *Lingua* 118 (pp.261-295)
- Jouini Kamel. (2019) The Derivation of ‘Verbless’ Sentences in Arabic: A Probe-Goal-Agree Approach. *Advances in Language and Literary Studies Vol 10, No 6*
- Jouini Kamel. (2020) Functional Structure in Standard Arabic and How It Is Derived. *International Journal of Linguistics Vol.12, No.1* (pp.115-152)
- Mikkelsen, L. (2005) *Copular Clauses. Specificational, Predicational and Equation*. Amsterdam: John Benjamins
- Ouhalla, J. (2013) Agreement Unified Arabic. In L. Cheng & N.corver(eds), *Diagnosing syntax* (pp.314-333). Oxford University Press.
- Radford, A. (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi,L. (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (eds), *Elements of Grammar* (pp.281-337).
- Shlonsky,U. & Rizzi, L. (2018) Criterial Freezing in Small Clauses and the Cartography of Copular Constructions, in: Hartmann, J., Jäger, M., Konietzko, A., Winkler, S. (eds), *Freezing: Theoretical Approaches and Empirical Domains*. Mouton de Gruyter, p. forthcoming.
- 竹田敏之 (2013) 『アラビア語表現とことんトレーニング』 白水社.
- 新妻仁一 (2009) 『アラビア語文法ハンドブック』 白水社.
- 原口庄輔・中村捷 (1992) 『チョムスキー理論辞典』 研究社出版
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造：ミニマリストプログラムとその応用』 松柏社.
- 八木久美子 (2013) 『大学のアラビア語詳解文法』 東京外国語大学出版会.